



銅屋根が参拝者を やさしく迎える

重願寺

参拝者が本堂の前で祈りを捧げるとき、その上部の唐破風と呼ばれる屋根がやさしく迎え入れる。銅をあしらった屋根は寺院としての風格を保ちながら、やわらかく優美な曲線を描く。どのような願いから、重願寺は新しく生まれ変わったのだろうか。住職と施工担当者にお話をうかがった。

安全・安心な寺をめざして

地下鉄都営新宿線「住吉」駅より歩いて5分、住宅地のなかに重願寺はある。創立は1590(天正18)年と古く、戦国武将・千葉邦胤の娘、不慮大禪尼によつて東京日本橋に草創された。現在の江東区猿江に移ったのが1795(寛政7)年。創立から420年以上の歴史を持つ浄土宗の寺院である。

重願寺は長い歴史の中でしばしば大きな災害に遭遇した。関東大震災や東京大空襲では壊滅的な被害を受け、一時は移転をも考えたが、地域の人々の強い要望でこの猿江の地にとどまった。

「時が移つて、2011年には東日本大震災が起こりました。その前日、重願寺では200名を超える人々が参加する行事を行っていました。もしこの日に地震が発生していたら…と考え、築50年になる本堂の耐震性を調べたところ、強度が不足していると診断されました。ご総代に相談したところ、目先の修繕よりも、将来に向けて安全な寺にする必要があると、改築に向けて背中を押してくれました」

こう話すのは大谷住職。



400m²を超える大断面の屋根は、職人が手作業で銅板一枚、一枚を葺いていった。

抗菌性にすぐれた銅合金製ドアハンドル

建て替えにおいては、特に屋根にこだわったという。

「旧本堂は上部が平面状となっており、勾配のある屋根はついていませんでした。お寺としての風格を保つものといえば、やはり屋根です。そのため新しい本堂には立派な屋根をつけたかったのです」

施工を担当した北野建設(株)橋本工事主任はこう説明する。

「銅屋根は、時間の経過とともに風合いが増す魅力があります。意匠性のほかにも、400m²を超える大面積の屋根に0.5mm厚の銅板を採用することで軽量化を図っています。銅板は一枚、一枚、熟練の職人が手作業で葺きました。また本堂の屋根が前方に張り出した部分を向拝むかひといいます。その向拝が参拝者を迎え入れるようになっていきます。このむくり屋根の先に曲線を連ねた形状は唐破風からふと呼ばれる形式で、中央が弓状に盛り上がり、両端が反りかえった曲線状に設計されています。より曲線のラインが際立つよう、屋根の正面部分には銅板にスリットを入れて仕上げています。さらに広間の出入口には抗菌性にすぐれた銅合金製ドアハンドルを採用しました」

改築工事では、基礎の部分から東京大空襲の際の残骸が多数でてきた。地下には重願寺の歴史がたくさん眠っている。「この地で幾多の困難を乗り越えてきたのですから、地域とともに重願寺は生きていかなければなりません」新しい寺のお披露目は今春に行われる予定で、地域の人々が多数招かれるそうだ。



北野建設株式会社
東京本社 建築部
工事主任 橋本 円 氏



浄土宗 重願寺
住職 大谷 亮雄 氏